

間違えてしまう日本人の英語と学習指導方法

青 木 美 優

序論

日本の英語教育を振り返ってみると中学、高校、大学の10年以上勉強しているのにも関わらず、日本人の英語は間違っている、身についていないとよく言われる。最近では幼稚園や保育園、小学校からの指導もされているのだ。しかし、それでもなお日本人の平均的な英語レベルは他国と比べて低い評価を受けているのである。英語学習者現役である大学生が書く英作文でさえいくつかの共通した間違いが見られるのだ。以下は日本人学生が書く典型的な間違いを含む英文である。

- (1) Last year, I bought a bicycle. The bicycle was expensive. But I wanted the bicycle very much. If I work hard at my part time job. I will make a lot of money. So, I worked hard at my part-time job.

去年私は自転車を買った。高かったが、非常に欲しかったのだ。一生懸命バイトをすれば、たくさんのお金が稼げると思ったので、そうした。
(マーク・ピーターセン, 2014, p. 8-9)

この文章は代名詞を使わず、同じ名詞 (bicycle, job) を繰り返し使用している。また、過去の話であるのにも関わらず、突然未来表現 (will make) が使われているのだ。

これらの問題が多くくの学生に共通して見られるということは学生の怠惰や学習時間、学習量の不足では説明がつかないだろう。その共通して間違ってしまう日本人の英語には学生時代に使用した教科書内で紹介されていた英文法に問題があるのではないだろうか。教科書作成にあたって数多くの規制が設けられており、文部科学省の厳しい検定を通過する必要がある。しかし、「その検定では英語の正確さ自体は暗黙の前提となっているため問われず、

(中略)間違いがそのままチェックされずに残るのだろう」(マーク・ピーターセン, 2014, p.15)と考えられているのだ。

英語の正確さが検定の対象になっていないというのは、驚きである。教科書の例文を律儀に活用するという日本人の特性があるなら尚更日本人の英語力の向上は見込めないだろう。

上記のことを踏まえ、日本人の英語の落とし穴はどこにあるのかについて、日本の英語教育に用いられている教科書と苦手意識の高い時制に着目し、本研究ではこれらに基づいて適切な学習指導方法を提案する。

第1節では現在の日本の英語教育の現状・課題について考察する。第2節では、時制に着目し、日本人の英語の落とし穴を明確にする。第3節では、これまでの分析結果をもとに日本人の英語力向上が期待できる指導案を提案する。第4節は結論である。本論文では日本人の英語力とは「聞く・Reading」「書く・Writing」「読む・Reading」「話す・Speaking」の4技能の内、話す技能を「やりとり」「発表」に分けた5領域を前提とし、論じていく。

第1節 日本の英語教育の現状・課題

現在の学校教育は先生が教科書に沿って授業を行い、生徒はそれを板書するといったある意味で一方的なものが主流である。その授業内で先生が生徒に教えるものといえばほとんどが英文法であり、それを基に読み書きの技能を高めるといものである。前述した4技能5領域とは程遠いというのが現状である。本論文では課題を大きく2つに分けることとする。

第1に、日本の英語教育の問題点の1つとして、英語学習者が高校入試や大学入試を目的としたものに偏っていることが挙げられる。英語は世界の人々とコミュニケーションをとる、情報を受信・発信するために非常に重要なのだ。グローバル化が進む世界に対応すべく、中心言語である英語を身につける(英語力を高める)ことは必要不可欠であるのだ。そのため、「聞く」「書く」「読む」「話す」の4つの技能をバランスよく身につけることが望ましいのだ。しかし、現在の高校・大学入試の内容は読み書きが中心であり、これでは4技能5領域をバランス良く身につけることはできないとは言えないだろう。学校の授業においても長文読解や教科書を基にした読み書き中心なの

だ。これは生徒に「英語は受験に必要だから勉強をする」という印象を与えてしまうことになり、その結果コミュニケーションツールの一つとしての認識が低くなっているのである。

第2に、授業で扱う教科書そのものにも問題がある。日本における小中高の英語の授業は日本人が作成した教科書に沿って進められるのだ。では、その教科書自体が間違いを含む例文で構成されていたらどうだろうか。知識を植え付けるところか間違いを教えていることになるのだ。これでは日本人の英語力は一向上がらないというのは言うまでもないだろう。前述にもあるように教科書作成には数多くの規制がある文部科学省の厳しい検定を通過する必要がある。しかし、英語のネイティブから見れば日本人が作成する英語の教科書は文法的に誤りがあるのだ。それは検定の対象が英語の正確さではないという点に問題があるだろう。もちろん、例文を通して学べることもたくさんあるだろう。実際に現代の日本において検定の対象は子どもたちが「多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い、豊かな心情を育てるのに役立つこと」(マーク・ピーターセン, 2014, p.15)にあるのだ。こういったところから日本人は律儀に習った文法や例文をそのまま活用し英作文を作成しているのだろう。教科書の英文の正しさというのは日本人にこういった特性が見られるのであれば尚更追求すべきだろう。これが現在の日本の英語教育の現状・課題の一部である。

第2節 時制

本人英語学習者が苦手とする文法項目に時制がある。この苦手意識の高い時制に着目し、日本人の英語の落とし穴を明確化していく。私自身、塾講師のアルバイトをしており、小学生から高校生の英語を担当している。授業を行う中で、時制でつまづいている生徒をよく見聞きするのだ。時制は仮定法や完了形といった全ての単元の基礎である。これを曖昧にしたまま新たな単元を学び進めることで英語に対する苦手意識が高まっていくだけだろう。では、なぜ日本人は時制でつまづいてしまうのだろうか。それは中学英語において一部の時制、表現方法しか教えられないという点にあるだろう。もちろんこれだけが原因ではないが、本論文ではこの点に着目して論じていく。中

学の3年間では通常、英語の時制、表現方法の半分しか紹介されないのである。英語では伝えたいことを表現するために、「現在形」「現在進行形」「現在完了形」「現在完了進行形」「過去形」「過去進行形」「過去完了形」「過去完了進行形」「未来形」「未来進行形」「未来完了形」「未来完了進行形」という12の表現技法が使われるのだ。しかし、それに対して中学英語では3年間かけてそのうちの6つ「現在形」「現在進行形」「過去形」「過去進行形」「未来形」「現在完了形」しか教えられないのである。日本語の観点からはこの6つでも十分成り立つのである。「～する」「～した」「～している」「～していた」というだけで問題ないのだ。つまり日本語から考えて英語では6つほど知っていれば不自由はしなそうだと考えられてしまうことも多いにある。そこにも日本人が英語を間違えてしまう落とし穴があるのだ。次の例文に注目する。

- (2) a. While I was on the train yesterday.

(昨日僕が電車に乗っている間に)

- b. I'm on the train now.

(僕は、今、電車に乗っているところなんだけど。)

- c. Tomorrow at that time. I think I will be on the train.

(明日その時刻には、僕は電車に乗っているだろう。)

(マーク・ピーターセン, 2014, p.1 8-19)

上記は3つの表現(過去・現在・未来)の例文である。英語は'was' 'am' 'will be' というように「時」による使い分けがあるのに対して、日本語の場合はすべて「～ている」のように「時」によって動詞の語尾が変わることがないのだ。この基本的な違いを無視して正確な英語の表現はできないだろう。しかし、こういった大事なことを中学英語どころか高校英語でも教えないのである。そういった小さなところから日本人の英語に間違いを生んでいくと考えられる。以下はある日本人大学生が書いた英文の一部である。

- (3) When I became a university student, I thought I want to study abroad.

(マーク・ピーターセン, 2014, p.22)

学生は入学してから留学したいと思うようになり、そして今もそう思っていることを表現したかったのだ。しかし、過去形を用いて書かれた学生の文では大学生になって留学したいと思うようになったということは伝わっても今の気持ちは不明になってしまうのだ。これに対して、

(4) Since becoming a university student, I have wanted to study abroad.

(マーク・ピーターセン, 2014, p.23)

上記の(4)のように現在完了形を使うことで依然として留学したいということがはっきりするのである。

では、なぜ現在完了形を使うべきところで過去形を使ってしまうのだろうか。教科書や学校での授業がその傾向を生んでいるといえるだろう。現在完了形は中学3年生で習うものとされている。それまでの授業ではたとえ現在完了形を使うべき場合であっても習っていないものは使ってはいけないのである。そこで習得済みの現在形や過去形を無理やり用いて、教科書の例文を作成しているのだ。習得済みの文法で代用しようとしてもそれはその場しのぎの文法であり、必ず誤差を生むこととなるのだ。結果、学校で習った例文をそのまま活用、応用したことで(3)のような過去形の乱用が起きてしまうのだ。このように日本人の英語の落とし穴は日本の英語の授業の進め方、教え方、そして教科書にあるといえるだろう。

第3節 指導案と改善策

これまでの分析結果をもとに日本人の英語力向上が期待できる指導案と改善策を提案する。指導案の一つとしてアクティブラーニングの導入、推進を挙げる。改善策として教科書で学ぶ順序変更を提示する。本論文ではこちらに焦点を当てて論じていく。これらから得られる成果、そして効果的に4技能5領域を身につける方法を論じる。従来のただひたすら板書をノートに写し、文法だけを暗記する授業では4技能5領域を身につけることはできないのだ。また、この従来の方法では暗記率・定着率が極めて低いのだ。そもそ

も英語は暗記科目では無いが、一方的に文法を教え込む授業では覚えなくてはという意識が強まり、結果苦手意識へと繋がってしまうのだ。日本における大学入試、高校入試の制度がこの現状を物語っていると言っても過言では無いだろう。「文部科学省によれば、アクティブラーニングとは今までの教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称で、具体的な方法としては、発表学習、問題解決学習、体験学習、調査学習も含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効的」(鳥飼他、2021、p.53)とされているのだ。このアクティブラーニングを用いることで苦手意識を回避するほか、3つの能力を身につけることができるだろう。インターネット情報の「アクティブラーニングはメリットだらけ！ 子どもに身につく3つの能力とは」によれば、1つ目に自ら進んで学ぶ能力が挙げられる。アクティブラーニングは生徒の主体性が伸びるように設定されているのだ。生徒自身を中心となって授業を進めることで自然と主体性が身につく仕組みになっている。2つ目は周りの皆と協力し合う力である。従来の授業は、他の生徒との関わりが薄く机と1人向き合うものであった。一方アクティブラーニングは、グループで議論を交わしたり作業や体験学習を行ったりするものになる。その為、他の生徒と積極的に関わる必要が多々あるのだ。メンバー内で誰に何を任せるかなどの役割分担を皆で話し合い、方向性を決めなければならないのである。今までの受動的な学習の中では身に付かなかった協調生が、他者との関わり合いの中で育まれ身につけられるのである。3つ目に新しい課題に気づき解決する力が挙げられる。他の人の意見を聞くことで今までになかった価値観や考えを知ることができるのだ。多くの視点から物事を捉えられるようになると問題の切り口が見えてくる。その結果、問題解決能力も同時に身につけることができるのである。これらの3つの能力の内、特に1つ目に提示した能力は文部科学省が教科書作成にあたって子どもたちが身につけられるために設けている検定内容と合致しているのだ。教科書作成の検定基準が英語の正しさではなく、子どもたちが道徳的観点などの心理面で成長が期待できるかという点にあるが、これを別の方法で子どもたちに身につけさせることができれば、英語の正しさに焦点をおくことができるのではないだろうか。アクティブラーニングこそその観点・能

力を文部科学省の検定なしで身につけることができると考える。また、この方法では教科書はあくまで参考資料であり、これに沿って授業する必要はないのだ。これならば、従来のように習っていない範囲をすでに習得済みのもので代用することもなくなるだろう。このようにアクティブラーニングを導入することで様々な能力を身につけることができるだけでなく、間違いの少ない正しい英語の知識を習得し活用に繋げることができるのだ。

次に教科書の順序変更がもたらす効果についてだ。本論文内でもいくつかの例文を扱った。上記の例文からもわかるように、適切に物事を述べるのにとっても重要な「過去完了形」が、なぜもっと早くに紹介されないのか。1つの理由に「日本語の観点からは、なくても良さそうだ」という考えもあるだろう。それよりも「中学生には、難しすぎる」という先入観が最大の理由では無いだろうか。本当は、過去形と一緒に紹介すれば、その使い分けの論理が中学生にも理解できるはずである。また、それぞれの用法を対照させながら紹介するのが最も効果的な勉強法ではないだろうか。以下の例文は過去形と過去完了形を用いたものである。

- (5) One man wanted to help Sergio. He was a lawyer, and he had been one of Sergio's children. Mario had grown up in Sergio's home.

(マーク・ピーターセン, 2014, p.34)

「ある男がセルジオを助けたいと思った」のは、この過去の話の中のその時(＝現時点)であり、彼が弁護士だったのも、過去のそのときなのだ。そのため、*wanted to help* と *was a lawyer* のようにいずれも過去形で表現するのだ。これに対して、もう大人である彼がセルジオの子どもたちのひとりだったのは、そのときよりもさらに前のことであり、セルジオの家で育っていたのも、そのときよりもさらに前のことなのだ。だから、*had been one of Sergio's children* と *had grown up in Sergio's home* のようにいずれも過去完了形で表現するのである。このように説明すれば、使い分けの論理が比較的わかりやすいのではないだろうか。しかし、実際問題として、「過去形」と「過去完了形」の紹介には、2年もの間が空くのだ。これでは、いつまで経ってもこの2つの基礎的用法の使い分けが分からず、時制に対して苦手意識を

生んでしまうのも仕方ないだろう。この解決策として教科書の順序変更を提案とし、過去形と過去完了形はセットで学ぶことを推奨したい。もちろん時制の部分だけではない。教科書にのしかかる制約全て撤廃することが望ましい。習っていないものを既に学習済みのもので代用するのではなく、学ぶ順番を変更することでおかしい文法を減らしていくべきなのである。会話であろうが、文章であろうが、自然な英語で物事を表現するにはこの制約の撤廃が必須であろう。学習指導要領の制限が英語表現に影響を大きく与えている。学習者である学生を慮って、覚えなければならない文法事項に制限をかけることは想像以上に大きな問題を生じさせるだろう。一口に時制の問題と言っても着目すべきは過去形と過去完了形だけではない。以下の例文はある大学生が作成した英文である。この英文は時制関係の問題が流暢に現れているのだ。

(6) When I became a university student, I thought I want to study abroad.

(マーク・ピーターセン, 2014, p.22)

この学生は「入学してから留学したいと思うようになった(そして、今もそう思っている)」と伝えたかったのだ。しかし、このままでは「大学生になった時は留学したいと思っていた」というニュアンスが強く、さらには wanted としなければ時制も一致しないという重大なミスをしていたのである。伝えたい意味をより正確に伝えるためには

(7) Since becoming a university student, I have wanted to study abroad.

(マーク・ピーターセン, 2014, p.23)

というように現在完了形を用いて述べるべきなのである。(6)の英文では「大学生になった時は、留学したいと思うようになった」ということは明確であるが、今の気持ちは不明なのである。「依然として留学したい」という意味を伝えるためには現在完了形を用いるべきなのだ。現在完了形を使うべき場合に過去形を使ってしまうという傾向にあるのはこちらも現在形・過去形を習った後、完了形を習うまでに間が空き、同時に紹介されないことが用法の

使い分けを難しくしているのだろう。そして、現在完了形の場合においても、現在完了形が紹介されるまでは、たとえ現在完了形を使う場合であっても代用された英文が教科書に並ぶのである。

(8) “You changed my life, Maria,” he said one day.

(マーク・ピーターセン, 2014, p.24)

上記の英文は「僕の人生」が過去に変えられたということは明らかであるが、その後どうなったのか、今はどうなっているのかまではわからないのである。もし、「今も依然として変えてくれたままだ」と伝えたいのであれば、現在完了形を使い、

(9) “You have changed my life, Maria” he said one day.

(マーク・ピーターセン, 2014, p.25)

と書くべきなのだ。しかし、習っていないものは教科書に載せられないという現在の日本の学校教育の暗黙の了解があるため、過去形で代用された英文があらゆる場面で教科書に登場しているのである。これでは現在完了を使うべき場合でも過去形を使ってしまう傾向にあるのも無理はないだろう。時制の問題を難しいだろうという先入観で勝手にレベル分けをし、紹介までに時差が出るのは大変危険なのである。大切なのは、伝えたい意味が正しい文法に基づいて表現され、正しい英文を読み書きできるようになるなどの4技能5領域を身につけるためにはアクティブラーニングの導入、推奨、さらに教科書の見直しである。豊富な正しい例文を交えて対照させながら活用できるようになれば、少なくとも用法をいつまでも把握できないという生徒の数はかなり減るだろう。

第4節 結論

日本人の英語力は世界的に見ればまだまだ足りないといえるだろう。日本人の英語力が世界的に低いと指摘を受けているのは決して、学習時間や学習

量の不足、あるいは学習者の怠惰だけではないのだ。しかし、こんなにも教育環境が整っている日本で英語力を高めることを諦めるのはまだ早い。学習方法や英語を学ぶことに対する意識を少し変えるだけで結果は大きく変わるだろう。

学校教育という観点から見れば、学習指導にアクティブラーニングを導入することで未来を担う子どもたちに様々な能力を身につけさせることができる。従来のただひたすら板書をノートに写し、文法だけを暗記する授業では身につけることのできなかった4技能5領域をアクティブラーニングの導入により、効果的に習得できるだろう。また、これを用いることで教科書が抱える問題の一つである、英文の正確性や既に習得済のものの代用による弊害などが改善できるだろう。

そして、何より大切なのは、難しいだろうという先入観を捨てることだ。この先入観を捨てた先に英語をより効果的に学ぶ順番が見いだせるのだ。多くの日本人が抱える英語の落とし穴の解決策の糸口として教科書で取り上げる文法事項の順番の変更に大きな可能性があるのだ。現在の日本の学校教育では過去形と過去完了形を学ぶまでに2年間もの間が空いている。過去形と一緒に学べば、その使い分けの論理が中学生にも十分に理解ができるはずであり、それぞれの用法を対照させながら学ぶのが最も効果的だろう。学習者の負担を慮って、遅かれ早かれ覚えなければならない文法事項に制限をかけることは想像以上に大きな弊害を生むことになるのだ。教科書に度々登場するその場しのぎの英文は非常に不自然に感じられる文であり、弊害を生むことに繋がるのだ。結論、習得済の文法で代用することは不可能であり、自然な書き方ができない例文は載せるべきではないのである。教科書で取り上げる文法事項の順番の見直しにより、基礎的用法の使い分けによくわからないと悩む、日本人を減らすことが期待できるのだ。このような学校教育の見直しが日本人の英語力を高める大きな一歩になるのだ。

参考文献

[インターネット]

日本人の英語教育の現状【良いところ・他国との比較検証】https://global-saiyou.com/column/view/english_education（閲覧日 6月 30日）

英語力とは何か？ 2020年の新学習指導要領の狙いと言語活動の両論「CAN-DO」「CAN-SAY」<https://kodomo-manabi-labo.net/series-shigenori-tanaka-english-03>（閲覧日 7月 19日）

英語の時制はたったの12種類！？ わかりやすく解説します。<https://brighture.jp/b-blog/1281>（閲覧日 7月 26日）

アクティブラーニングはメリットだらけ！ 子どもに身につく3つの能力とは <https://studystudio.jp/contents/archives/38387>（閲覧日 7月 27日）

[和書]

マーク・ピーターセン (2014) 『日本人の英語はなぜ間違えるのか？』 集英社

鳥飼久美子 (2021) 『よくわかる英語教育学』 ミネルヴァ書房